

追悼

花井哲郎先生のご逝去を悼む

池谷仙之



日本古生物学会元会長で名誉会員の花井哲郎先生は2007年10月26日に心不全でご逝去されました。享年83歳でした。学界は世界に誇る大御所の一人を失ってしまいました。介形虫類の研究における国際的に傑出した業績は述べるまでもなく、75周年を迎えようとしている本学会にとって、今日ある発展の礎、特に新しい古生物学の潮流を創出された功績は高く評価されるものであります。門下生の一人として、先生のご足跡を辿りながら、敬愛する先生との思い出を混じえてここにご遺徳を紹介させていただきます。

先生は、大正13年(1924)3月13日、地理学者、花井重次先生の長男として神奈川県比々多村神戸(現伊勢原市)に誕生しました。小中学校は東京高等師範学校の附属校に通われ、幼少の頃は日が暮れるまで蝶を追いかけていたという「昆虫少年」でした。旧制弘前高等学校から東京帝国大学理学部地質学科に進学され、昭和23年(1948)に卒業、2年間の大学院特別研究生を経て、燃料地質学講座の助手になられました。学生時代は戦争末期から戦後の混乱期に当たり、軍需工場への学徒動員、地質学科の疎開地での講義、恒常的な食料難のもとでの卒業研究などで、「落ち着いて勉強できる状況にはなかった」と、その頃の話をされたことがあります。小林貞一教授に師事し、卒論は三陸海岸の宮古層群を研究されました。ここで得られた「矢石」の胎殻構造の解析はこれまで知られていなかった個体発生上の新発見に繋がり、東京大学理

科紀要(1953)に上梓されました。矢石を用いたユニークな殻形態の発生学的、古生態学的アプローチは後に2編の論文として古生物学会誌(1982, 1983)に発表されています。卒論以来の宮古層群に関する詳細な研究データはそのほとんどを後進に譲られ、それらはその後、多くの研究成果を生んでおります。1978年に日本最初の恐竜化石の発見として報道された「茂師竜」は、門下生、加瀬友喜君の岩泉での野外指導の時に偶然見つけられたものでした。演習報告では小林貞一先生が採集された満州の白亜紀松花江層群(Sungari Group)からの非海生介形虫を記載されました。今でこそ、中国の石油資源開発に伴う非海生介形虫類の研究は盛んになりましたが、この論文(1951)は中国大陸における介形虫化石の最初の報告だったのです。

昭和28年(1953)、フルブライトの奨学生として米国ルイジアナ州立大学に留学され、ここで生涯の研究テーマとなる介形虫分類学を本格的に学ばれました。当時のルイジアナ大学は介形虫学の権威、H. V. Howe教授が率いる世界でも類を見ないほど充実した研究室でした。そして介形虫層序学は南部の油田地帯を背景に、油田探査の花形でもありました。世界中のトポタイプ標本と文献を完備した研究室には世界各国から多くの学生が集まり、そこで学んだHowe門下生は石油探査、微古生物学のエキスパートとして世界各地で活躍しております。先生は渡米される時、介形虫類の現生標本(主として三浦、房総、伊豆半島の沿岸種)と化石標本(鮮新世の瀬棚層、沢根層、高鍋層など)を持参し、3年間の留学中にもっぱらこれらの分類学的研究に専念されました。日本産の介形虫類は既存の分類体系では分類しきれず、結局、高次レベルの新しい科や亜科を創設しなければならなかったとのこと。それらの研究成果は博論として纏められ、ルイジアナ大学からPh.Dの学位を授与されました。帰国後、その成果は東京大学理科紀要に一連の論文(Studies on the Ostracoda from Japan I~V, 1957~1959)として発表されました。また、これらの分類基準として用いた介形虫の蝶番構造を総括し、その分類学的形質評価を行った論文(1961)によって東京大学から理学博士の学位を取得しております。ちょうどこの頃、R. C. Moore教授(カンサス大学)による”Treatise on Invertebrate Paleontology”の編纂が順次進み中で、Part Q, Arthropoda 3 (ostracoda) (1961)の編纂をHowe教授が受け持つことになり、花井先生はご自分が創設した最新の分類群を執筆するという幸運を得ました。というのも、当時、“Treatise”の編纂執筆に携わった日本人は畑井小虎先生(東北大学)と二人だけでした。この執筆は「花井介形虫分類」を一躍世界に知らしめることとなり、その後の研究成果を含めて、オストラコーダの世界では、「Tetsuro Hanaiを知らぬ者はもぐりである」と云われるくらい、世界的に著名な存在であります。先生は留学中、帰国後の日本での研究条件を想定しながら、出来る限りの情報を収集されました。その中に米国産介形虫のトポタイプ標本(堆積物試料)と重要文献のマイクロフィルムがあります。当時は複写機の

なかった時代で、毎日少しずつ撮影されたのだそうです。持ち帰られたマイクロフィルムは184本に及び、フィルムには分厚い文献を押さえる先生の指が写って残されています。私が先生の抜き刷り箱にない文献を図書館に探しに行こうとしていたら、「多分、どこに行ってもないだろう」と云われて、そのマイクロフィルムの中から探し出して下さったことが何度かありました。当時の私にはその価値が分からなかったのですが、後年、オストラコーダの資料収集を誇る Senckenberg Museum で G. S. Brady の原記載のある Les Fonds de la Mer (1867-1872) をコピーしようとしたところ、ここにはありませんでした。H. Malz 博士から、帰路、パリに寄って見ることを勧められましたが、そのまま帰国してしまい、この残念な一件を先生に話すと、「それならあるよ」といってマイクロフィルムを渡され、感激した覚えがあります。現在、これらは先生の集められた膨大な文献と一緒に静岡大学理学部地球科学教室に寄贈され、「花井文庫」として整理・保管されております。アメリカのトポタイプ標本についてもよく利用させて頂きました。

先生は1956年にアメリカ留学から帰国され、1957年に講師、1958年には助教授（古生物学講座）に昇任されました。この頃から、「より生物学的側面を強調する古生物学」、即ち「パレオバイオロジー」の重要性を熱っぽく主張されていたと当時大学院生であった鎮西清高、速水格の両氏から伺いました。先生が留学されていた頃（1950年代）のアメリカでは、進化の総合説を経て進化的古生物学（Evolutionary Paleontology）あるいは生物学的古生物学（Paleobiology）が台頭しはじめた時期であり、これらの考え方を日本に持ち込まれたものと思われます。しかし、このような斬新な考え方は小林貞一教授をはじめ、地質学的側面の強かった当時の古生物学界ではなかなか受け入れられなかったようです。この視点は、現在でこそ、学界に深く浸透しておりますが、日本に定着するまでにはそれから20年余の歳月を要しました。欧米諸国でもパレオバイオロジーを強く意識した研究成果が続出するのは1960年代も後半になってからのことです。ちなみに、雑誌、“Paleobiology”がアメリカで創刊されたのは1975年のことであり、先生がこの新しい世界の潮流を日本にいち早く紹介し、喚起された意義は大きかったと思います。最近ではパレオバイオロジーを志向する研究者の数も増え、その研究内容も多岐にわたって展開されています。

1964年、私が東京大学の大学院に進学したのは、花井先生の古生物学に対するこのような思想を非常に高く評価していた鹿間時夫先生（横浜国立大学）の強い勧めによるものでした。当初、希望していたオストラコーダをテーマにすることは助教授のもとでは叶いませんでしたが、先生に巡り会えたのは幸運でした。当時のことを思い起こすと、先生は「古生物学が過去の生物の生命現象を解き明かそうとするのなら、最先端の生物学的手法を取り入れなければならない。だから、今、現生生物学の基礎知識が必要なのだ」と熱っぽく語り、私に対しては地質学の講義はほどほどにして、動物学や植物学、生化学の講義を受けるよう勧められました。他学

科の学部生に混じってこれらの講義や実験実習を受講するに当たっては、担当教官にわざわざお願いに行き下さるほど熱心でした。そして「生物学を偵察しに行くのではなく血肉にしなければならないのだから、聴講するだけではなく最後の試験まで受けて単位を取得するように」とのアドバイスも頂きました。これらの講義を、実は、先生ご自身が聴講しなかったのかも知れません。当時、日課のように通った喫茶店（近江屋）で講義の内容や感想を聞くのも楽しかったようですが、私の消化しきれない報告に対して、納得されるまで根掘り葉掘り問い質される先生の食欲さには驚かされました。また、先生の古生物観を拝聴するのも、議論をするのも、論文の添削をして下さるのも、もっぱらこの喫茶店でした。また、週末にはよく先生と三浦半島、三崎の臨海実験所で過ごしました。先生が来られた名目は博論で有孔虫の生態観察と飼育実験をしていた私の指導ということでしたが、先生が来られると研究対象は急遽介形虫に変わってしまいました。私にとっては、この時の「門前の小僧」が後に介形虫学に何の抵抗もなく転向できた基礎となりました。実験所での多くの著名な生物学者との交流を通して、先生の生物学的古生物学に対する情熱は益々深まって行ったように思われます。このような先生のもとで、現生の底生有孔虫を素材にした博論を迷うことなく仕上げられたことは私にとって幸せなことでした。学位審査の時、古生物学講座の博論に「化石の記載がない」とのクレームを先生が回避して下さったのも忘れることのできない思い出です。

1967年、先生はアメリカ科学財団の招聘でスミソニアン自然史博物館の客員研究員として再び渡米されました。ここで纏められたのが、1亜科 Schizocytherinae を用いて付属肢（軟体部）と背甲（殻）の形成過程を対応させ、進化の総合理論に基づく高次分類基準を論じたものでした。この論文は Journal of Paleontology (1970) に掲載されました。この中で、背甲表面に開口する感覚子孔が個体発生に伴って増加すると共にその形態型とその数や分布位置は種ごとに異なるが、種内では安定した形質であることを初めて指摘しました。この分類手法は門下生に受け継がれ、多くの介形虫に適用され、分類群の類縁性や系統関係の推定に応用されることとなります。1970年に出された浮遊性介形虫 Cypridinids に関する論文のウミホタル (*Vargula hilgendorfi*) の軟体部付属肢などの綿密なスケッチも、スミソニアン滞在中に L. S. Kornicker 博士の研究室（甲殻類研究部門）で解剖、描画されたものと思われます。

1972年、先生は教授に昇任されましたが、遠慮深い先生は何故か卒論生にオストラコーダのテーマを与えませんでした。静岡大学から助っ人（助手）として呼び戻され、日本に Howe 研究室を再現させるのかと期待していた私には理解できないことでした。私が介形虫に転向したのは、学生がやらないのなら自分がやるしかないという思いからでした。古生物学講座が介形虫色をより強め、もじって“オストラコーザ”と呼ばれるようになるのは、私が再び静岡大学に転出してから後のことです。

日本および東南アジアにおけるオストラコーダの研究史上、特筆しなければならないのは、先生によって編集された「介形虫チェックリスト」の出版であったと思います。日本産介形虫類のチェックリスト(1977)はChallenger Report(1880)以来1976年までに知られる化石および現生介形虫類(368種)について、すべて模式標本にまで当たって分類学的再検討を行ったものです。日本および周辺地域から産出する介形虫の全貌が把握され、煩雑であった個々の種は花井分類のもとに整理されました。この出版によって種の同定が容易になったため、介形虫学を志向する学生が急増し、その後の日本における介形虫学を飛躍的に発展させました。さらに暖流系種の起源を探るために不可欠であった東南アジアのチェックリスト(1980)が作成されました。1977年までに記載された696種、14亜種について、ドイツ、オランダ、イギリスなどに保管されている標本を検討した上で完成されたものです。この出版を契機に介形虫学者の目は一斉に東南アジアに向けられ、各国は争って東南アジアに再進出しはじめました。これらのチェックリストの作成をお手伝いする過程で基礎的な分類をマスターできたことは、遅まきながら介形虫に転向した私にとって最大の収穫でもありました。先生はまた、これからの介形虫学の進むべき方向性を提示した“Studies of Japanese Ostracoda”(1982)を編集され、さらに、D. M. Raup & S. M. Stanley の名著“Principles of Paleontology”の教科書を共訳(古生物学の基礎, 1985)されるなど、介形虫学ばかりでなく古生物学の研究に大きく貢献されました。

欧米を舞台に4年ごとに開催されていたオストラコーダの国際学会を日本に誘致したのは1985年のことでした。この会議の開催は先生の退官(1984年)記念事業を模索する中で出てきた一つのアイデアではありましたが、当時の日本のオストラコーダグループは国際学会を運営できるほどには育っていませんでした。古生物学分野では日本ではじめて開かれる国際会議であり、すべてが暗中模索の中、先生は大会委員長として見事に第9回(静岡, 1985)の会議を成功させました。第8回(Houston, 1982)の会議で、オリンピックさながらの誘致合戦の末に決戦投票で次回の開催国が決まったことや、会議後に一緒にルイジアナを訪ね、先生の学問のルーツを垣間見させて頂いたことなどが懐かしく思い出されます。本会議は「オストラコーダの進化」を主題に20ヶ国127名の参加者を得て、これまでの最大規模のシンポジウムとなり、その運営振りは後の会議の見本とされています。これも先生のご人徳によって、周囲の方々がオストラコーダを越えて我がことのようにサポートして下さったからに他なりません。この国際学会の開催を契機にして、日本のオストラコーダの研究は世界に向かって羽ばたき始めたと言えるでしょう。先生お一人からはじまった日本の介形虫学は現在では量・質ともに注目される研究成果を出す世界最大の研究集団にまで成長しました。これを牽引しているのが、当時、学部生、院生としてはじめて国際学会を体験した者達であることを思うと、われわれ後進に多大な影響を与

えてくださった先生に改めて感謝いたします。本会議の論文集“Evolutionary Biology of Ostracoda”(1988)は90編を収録した1336頁、120図版の大著となり、“Developments in Palaeontology and Stratigraphy”のシリーズ(No. 11)としてElsevierから出版されました。先生の研究業績は、論文数にしてけして多いとは云えませんが、一編一編の内容は緻密な論証の上に構築された秀作ばかりで、今もなお、分類学的論文には必ず引用されております。先生は常々、「論文は数ではなく、内容なんだ」とおっしゃり、近頃の論文数で業績評価するシステムを批判しておられました。

東京大学を定年退官され、名誉教授となられた先生は1988年大阪学院大学法学部の教授となられ、神戸に居を移して1995年まで文系の学生に「自然科学の面白さ」を講じ、広く自然科学の普及に努めました。この間、図書館長を務め、情報学部の新設にもご尽力されました。花井先生のお人柄は、最近(2006年)出版された、自らをカイミジンコになぞらえて語られた随筆集、「カイミジンコに聞いたこと」によく表れております。日常生活の中で目にする何気ない自然やごくありふれた日常茶飯事を、普通は誰でもよいこととして、気にも留めないでやり過ごしてしまうのに、このミジンコ先生は「なんで」「どうして」と子供のようにしつこく詮索好きです。これらを短く軽快なタッチで描き、一話の終わりには古生物学者としての「落語で云う落ち」が簡潔に述べられています。先生の自然史科学・科学哲学の原点がここに語られているような気が致します。虫取りにうつつを抜かず少年だった先生が、退官後に再び蝶を追いかける昆虫少年に戻りました。ごく最近でも「身体には自信がある」と云われるほどお丈夫で、10年来あたためていた「科学哲学」を執筆されておりました。そして急逝された前日には普段とお変わりなく奥様と散歩されるほどお元気でした。きっと深い眠りの中で今も捕虫網を振り回して蝶を追いかけておられるであろう先生が目に見えます。そこにはどんなチョウチョが飛んでいるのでしょうか。振り返れば、いつも先生の着物の裾を握ったまま放れられずに来たような気が致します。沢山のお教を頂き本当に有り難うございました。

最後に、日本古生物学会に関連した先生のご活躍を略述いたします。

花井先生は1961年に「介形虫の研究」によって日本古生物学会第一号の学術賞を受賞され、また2001年には国際的に傑出した研究業績と長年にわたる古生物学への功績に対して学会賞(横山賞)が贈呈されました。本会は創設以来、長い間、事務局を東京大学地質学教室に置いていたため、花井先生は学会運営の中核として学会を支えておられました。1964年からは評議員(～1987)および常務委員(～1979)として、また1979年から1984年まで二期に亘って会長を歴任され、学界を指導されました。さらに本会の代表として国際古生物学連合(IPA)の評議員(1981～1983)、日本学術会議古生物学研究連絡委員会委員(1966～1987)、同委員長(1981～1986)を勤められました。本会の発展に心血を注がれた先生に感謝いたします。